

お囃子はやしが聞こえたら獅子舞と春が来るよ

早春の守山を歩く獅子神楽の山本勘太夫社中



冷たい風の中、笛や太鼓の囃子が響き、真っ赤な顔の獅子舞が家々を回って踊る回籠かいはんの風景が早春の風物詩になっています。今回は、市内で多くの地域を回籠する伊勢大神楽山本勘太夫社中やまもと勘太夫社中（山本勘太夫家元および同門の神楽師）取材しました。

獅子舞神楽は国重文の伝統芸能

市内ではなじみ深い伊勢大神楽獅子神楽ですが、その歴史は古く、国の重要無形民俗文化財にも指定されています。貴重な伝統芸能として海外公演に招かれることもあるといいます。伊勢大神楽は、江戸時代に伊勢神宮の神札を授けて諸国を歩いたのが始まりとされています。

社中の信条は「人様に喜ばれる大神楽」

伊勢大神楽は、家々を回って伊勢神社の神札と福を授けるだけではありません。地域の神社や公民館に町民が集って見物する「総舞は、人々にとつて娯楽と交流の場でもあります。伊勢大神楽といえば「獅子舞」

家々に福を授ける旅をしながら、神職としての仕事や稽古に明け暮れるのですから、自宅にはめつたに帰ることもままならず、ではありません。山本勘太夫社中も途絶えた歴史があります。中興の際「同じ大神楽をするのなら、人様に喜ばれる大神楽をする」を社訓にしています。

現在の山本勘太夫は平成26年に襲名して父の跡を継いだ若い家元、社中には若手の神楽師がそろっています。神楽という古典芸能の伝統を守りながら、見物する人たちの世代や時代に合わせた工夫もしているといいます。

獅子舞神楽の風景を郷土の自慢に

伊勢大神楽は、2月を中心に市内の町々を回籠します。時代の流れで共働き世帯が増え、平日留守の家が増え、決まった日に決まった地域を回ります。山本さんによれば、伊勢大神楽には、今でも神事・娯楽・歳時記と3つの役割があるといえます。行く先々で求められる役割には偏りがあるものですが、守山は偏りが少なくすべての役割をバランスよく担える特徴があるそうです。

新型コロナウイルス感染症の拡大で「総舞」が中止になったり、無病息災と頭がよくなるようにと願って獅子に頭をかんでもらうのを控えたり、伊勢大神楽にも影響があります。山本さんは「近江は伊勢大神楽と縁が深い土地柄です。まちが発展しても、獅子舞が響き、獅子舞が歩く伝統的な風景を、郷土の自慢と想ってもらえたら」と話していました。



山本勘太夫社中の皆さん(中央は山本勘太夫家元)



※写真は昨年(2021年)の守山幼稚園で行われた総舞と、1月4日に大津市で行われた総舞の様子。